

草は枯れ、花はしぼむ。

(『イザヤ書』四〇章8節)

どんなにか健康で、若さを謳歌している人にも、いつかは死が訪れる。人は永遠に生きることはできない。「地の塵」から造られた人間は「塵に帰る」のである。人の一生は、朝に咲いて、夕べにしぼむ草の花のようだ、といわれれば、そうかも知れぬと思う。はかないといえ、はかない人の一生である。このような感覚は人類共通の感性に基づくのであろうか。旧約聖書を残した人々も同じ感覚を抱いていた。人の命は草の花だけでなく、瞬時に吹き去る風や実体のない影にも譬えられています。だからといって、彼らは人生をはかなみ、切ない感傷に耽ることはなかった。自分を放棄して、刹那的な生き方を選ぶこともなかった。なぜなら、いずれは朽ちゆく人の命が、束の間でありながら、なお、永遠の神の意思のもとに生かされている、と信じたからである。見えるものは見えないものに、限りあるものは限りないものによって支えられている。自分のようにちっぽけな者でも、宇宙万物を創造した神はその心に留めてくださっている。今から二千年以上も前の古代西アジアの一隅で、真剣に神を信じて歴史を生きぬいた人々の信仰の知恵がここにある。それによって、彼らはときにむなしく見える人生にかけがえのない価値を見出すことができたのである。